
ソプラノ

北原小織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソプラノ

【Zマーク】

Z5808D

【作者名】

北原小織

【あらすじ】

突然にやつてくる切なさ。その糸口をさがしながら、聰美はゆつくりと毎日を生きていく。誰かと出会いながら。誰かと共に。

第一話・名もない色

時々なぜか、どうしようもなく切なくなることがある。

それは夕方だったり、徹夜中の深夜二時だったり、友達と遊んでいる時でさえ、初雪が舞い降りる瞬間のように突然に、全く予測不可能に私にとりつく。振りほどけない私は、世界最小の生物になつたかのように切なくなり、いつだつて私のすぐそばにある真っ黒な不安に落ちてしまいそうになるのだ。

「……つて」と、ない？」

「うーん。よく分かんないなあ」

隆一くんは長く伸びたひげをなでながらそう言い、コーヒーを飲んだ。

春の柔らかさを感じるこの大学の中庭ベンチは、異常なくらい心地がいい。隆一くんは聞いていたかさえも分からぬ。私の「切なさ」の話を。

「そつか」

「ごめん」

「別に、謝りなくていいよ。正直私もよく分かんないし」

私は、「どうして突然切なくなるのか」それが少しでも知れたらと思い、友達や知り合いに片つ端から話してきた。反応は大体この三択。「首をかしげる」「笑う」「病院を勧める」。

「聰美は、感性が鋭いんだよ」

隆一くんは、沸いて出たようこいくなり言つた。

「感性?」

私は聞き返した。

「そういう、微妙な感情を自覚できるつていつか。研ぎ澄まされてんの。才能だよ」

「才能かなあ」

「才能だよ。俺にはないから、ついやめじー」
「芸術家なのに?」

私は言った。隆一くんは苦笑した。

隆一くんは、いとこの美大生だ。

肩まで伸びたロン毛と、それと一体化した長いひげが目をひく、
全体的にホームレスのよつた雰囲気の一十一歳で、私には理解でき
ないそのファッショセンスがすぐアーティスティックだ。

一度彼の絵を見たことがある。どんな絵の具を混ぜたらこんな色
になるんだろうと思いつほど、微妙で、美しい色の鳥だった。

だから、隆一くんには期待していた。

あんな色をつくるんだから、私と同じようなことがあるんじゃな
いかと思っていた。けれどそのカンは外れてしまった。あの色も、
適当につくつただけかもしれないな。

なんて思つてたら、いつの間にか隆一君は大学へ戻つていった。
逃げやがったな、あのヤロウ。

第一話・塩味卵焼き

中学生くらいのとき、家に帰ると、食卓に卵焼きがぽつんと置いてあることがあった。

それは今晚母がいないという意味だった。置手紙じゃなくて、卵焼きだった。

全然甘くない、塩味の卵焼き。母がつくる卵焼きはいつも塩味で、私はそれで育ったから、初めて友達のお弁当の卵焼きを食べたとき、あまりの甘さに感激したことがあった。

妹の恵理が帰宅して、卵焼きとカツチラーメンなんかを食べながらだらだらと世間話をした。

一つ下の恵理は、愛嬌があつて「普通に可愛い子」だった。

常に恋をしているらしく、いつも私に恋の話をした。聞き手の私は、それは相手を好きなんじゃなくて恋が好きなんだよ、なんて鋭い真実をつけたりはしなかった。

恋の話をする恵理は、可愛かったからだ。

母は自由な人だった。

父は私が四歳の時死んでしまったから、母は「女性」だった。恋多き人だった。そのせいか美しかった。若々しく、遊んでいた。

それでも母は、毎日欠かさず父の仏壇に手を合わせていた。

どんなに遅く帰つても、必ず仏壇の前に正座することを、私と恵理は知っていた。

ついでつきまで他の男と会っていたのに、という矛盾を感じたこと、父に手を合わせる母の背中の本当の意味で綺麗だったこと、それは今でも鮮やかに思い出せる。

私が高校生になったとき、母は入院した。

癌だった。

そのとき私は初めて母の年齢を知った。五十歳を越えていた。高校生の娘がいるんだから当然だった。けど、驚いた。

なぜなら、私が見ていた母は、若く美しかったからだ。

化粧をおとし病院の白衣を着た母を見たとき、私はあの突発性の切なさに襲われた。

癌と聞いたときの驚きと、入院と聞いたときの悲しさ、病院のにおい。それと切ないのとで、私はひどく暗色なマーブルの渦に飲み込まれて泣いてしまったのをよく覚えている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5808d/>

ソプラノ

2011年1月9日14時31分発行